

国際交流から多文化共生へ

先月の末に東京で「国際交流・実践協力者全国会議」というものがあり、実践も協力も大してできていないのですが、私もこれに参加しました。国・県レベルの国際交流組織やNPO、NGOが一堂に会する場で、今年で3回目。いろんな話題があった中で印象に残ったことは、災害発生時のトラブルについてです。

例えば、被災後の援助物資の配給の際、外国人居住者は、不安から、もらえる時にたくさんの物を確保しようとするところがあるらしい。被災地では、「明日も、あさっても、定期的に配給があるから心配ない」と外国人に伝えることが、なかなかできない。その結果、「外国人が独り占めした」と日本人から文句が出て、反対に「同じ被災者なのに、外国人という理由で差別的な扱いを受けた」と人権問題に発展することがあるという話でした。

今や国際交流は、国の際ではなく地域の中の日常の問題であり、従来の国際交流という言葉では、この状況を説明するには不足があるような気がしました。それに代わる言葉としては、多文化共生が、今のところ最も適切でしょうか。

10月に、熊本市近郊のベッドタウンで、「防災マップは自分の頭の中に描き込め！」というワークショップをする予定です。この町にも、東南アジアから働きに来ている人が共同生活するアパートがあるそうです。知りませんでした。普段は、雇い主の企業が、会社まで送迎したり、様々な手続きをしたり、彼らの生活の面倒を見ているそうですが、もし災害があったら、住民同士で助け合わねばなりません。その備えを、どのようにワークショップや日常の共生に組み込みこむか、工夫のしどころです。

ワークショップにおける自己紹介の演出

これから話し合いをはじめようというとき、自己紹介だけで30分も費やしてしまっただけは勿体無いです。しかし、往々にして、自己紹介を逸脱した演説を聞かされ、無駄な忍耐の時間を費やすことになります。そうなると、雰囲気は壊れ、その後のリードが難しくなります。

ワークショップにおける自己紹介は、漫才やコントで言うなら、「ツカミはOK!」という部分です。ここで進行役は、参加者を自分のペースに引き込まねばなりません。また、自己紹介を通して、参加者の頭を、これから始まる話し合いのテーマについて考えが出やすいように準備運動させることも大事なことです。例えば、『健康づくり』について考える住民参加ワークショップを開催する場合、自己紹介では、次のような演出をします。

- 1) 今から、自己紹介をします。名前と所属と「身近にいる、一番健康で長生きしている人」を一人だけ紹介してください。その人は、何歳ですか。あなたとの関係は？
- 2) 一通り自己紹介した後で、一番のご長寿を紹介した人、お一人だけから、そのご長寿が日頃どのような生活をしているか話をしてもらいます。さて一番は何歳でしょう。
- 3) 2分後に自己紹介を開始します。さあ、身近な健康長寿さんを思い出してください。

このようにすれば、基本的に「名前」「所属」「続き柄」「何歳」の4つだけを、テンポよく順番に発言させることができます。また、このとき参加者各人の頭の中は、すでに健康について真剣に考える状態になっています。「一番・一人だけ」の言葉が、逸脱演説を防止します。